

## 『忠孝人竜伝』考

著者	藤川 玲満
雑誌名	ノートルダム清心女子大学紀要．外国語・外国文学編，文化学編，日本語・日本文学編
巻	37
号	1
ページ	1-11
発行年	2013
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1560/00000151/">http://id.nii.ac.jp/1560/00000151/</a>

## 『忠孝人竜伝』考

藤川 玲満

### 一、秋里籬島の初期小説

『忠孝人竜伝』(半紙本五卷五冊、天明二年(一七八二)正月京都永田調治等刊)は、秋里籬島が著した読本である。籬島の著述は、安永五年(一七七六)正月刊『信長記拾遺』に始まり、同年九月刊『誹諧早作伝』、安永九年七月刊『都名所図会』と続き、本作は四作目となる。評判を得て大流行の書となる『都名所図会』が世に出た後であるものの、本作の著述・出版は、一連の名所図会が続刊される事態には先立つ時期に当り、籬島のごく初期の著述活動のうちに位置するものとして注目される。

この作品についてこれまでに言及されたところを挙げると、浅野三平氏は、これが籬島の唯一の本格的読本であり、「天明二年という早い時期にもなされていることは注目に値する。なぜなら、この期には読本界に未だ京伝・馬琴の活躍は見られず、明和安永期の上方読本とでも言うべき短篇を主とする前期読本が主流をなしていた時代だからである。」と述べられている<sup>(1)</sup>。また横山邦治氏は「発生期読本に見られた仇討ち話を中心とした実録もの」(実録種の読本)の一つに本作を挙げられ、「これらがやがて春暁斎の絵本ものへつながるものとして注意しておかなくてはならない」とされ<sup>(2)</sup>、

このことを受けて高橋圭一氏は、本作と交渉があると思われる実録が『非莫不朽全書』であると指摘されている<sup>(3)</sup>。

筆者は先に、石山本願寺合戦を描く軍書である『信長記拾遺』について検討を行い、この作品が、実録の『石山軍鑑』(立耳軒著、明和八年(一七七二)成)を種本とするものであること、そして種本に拠りながらも、籬島自身や板元書肆の浄土真宗との関連や板行に際する配慮的な企図を要因に、宗派に関わる叙述を弱めて軍書・小説としての色合いを強める方向性を持って形成された様相を明らかにした<sup>(4)</sup>。本稿では、『信長記拾遺』に次ぐ小説の二作目で、従来その成り立ちについての詳細な検討のなされていない『忠孝人竜伝』が、如何に形成されているかを分析していくこととする。その上で、『信長記拾遺』および籬島の後年の小説作品との連関、そして同時代の小説の展開における籬島の初期小説の位置を考えたいと思う。

### 二、『忠孝人竜伝』の概略

まず、『忠孝人竜伝』の概要を紹介する<sup>(5)</sup>。本作は、五卷五冊全二二条から成る敵討話であり、挿絵が一〇図入り、籬島の自序がある。この板本の特異な点としては、題名が、外題・内題・目録題・

尾題は「忠孝人龍傳」であるところが、板心には「敵討人龍傳」とあることが挙げられる<sup>(6)</sup>。では、その粗筋を述べていく。

### 東条助太夫斬殺、山中惣次郎逃亡

筑紫の一城主、倉田左衛門家の大目付役東条助太夫が同じ家中の山中惣次郎に斬殺される。山中は逃亡し、東条の妻と幼少の二子が遺される。

### 東条の家来江原兄弟、敵捜しに出立

東条の家来である江原利兵衛・嘉兵衛兄弟は、敵山中の居所を捜し出すために出立し、吾妻の方に向かう。その途次、兄弟は路費を得るため、利兵衛が南蛮風衣装を着し、嘉兵衛がその家来姿をして南蛮流の名医より伝授された瘡の薬を調合し、売り弘める。

### 東条の一子助太郎（図書）、敵捜しに出立

その後、東条の一子助太郎も成長して一五歳になり、西国巡礼と称して主君の許しと刀を賜わり、図書と改名して敵捜しに出、吾妻の方へ向かう。小田原にて同宿の侍に山中の居所を伊勢路か大和郡山と聞かされ、引き返してまず伊勢路へ向かう。

### 江原弟の妻、遊女となる

江原嘉兵衛の妻お瀧は夫の身を案じて大坂まで来るが、勾引に遭って新町に売られ、松野と改名して流行の遊女となる。松野は富豪の昆陽池銭右衛門に身請けされ、古物を蒐集して奢侈を尽くし、相場に手を出して金銀を蓄える。

### 図書に俳諧宗匠寒灯庵啼猿が助力、剣術名人浅田帯刀に入門する

図書は伊勢で山中の居所がつかめず、大和郡山に至る。この地で俳諧の宗匠寒灯庵啼猿と懇意になり、身上を打ち明ける。啼猿は敵を捜す方便として奉公に出ることを勧め、図書は勇助と称して、

まず三百石取の剣術名人浅田帯刀に仕え、入門して剣術に励む。

### 勇助（図書）、中山五助方に奉公に出、中山を敵と知る

ある夜、勇助は通りがかった中山五助の屋敷前で侍に因縁をつけられるが、剣術の手練により見事な立ち回りを見せる。これに感じた屋敷の主人中山が所望し、勇助は山中の屋敷に奉公に出る。ある日五助の留守中、勇助は屋敷の箆筒に筑紫の山中惣次郎の免状を見つけ、五助が敵であることを知る。のち、気を許した五助親子も、勇助が助太郎であるとは知らずに事実を告白する。

### 勇助（図書）、啼猿と謀り、中山の息子を斬る

暇を得て啼猿方に戻った勇助は、敵発覚の次第が全て啼猿の智謀であったことを知る。啼猿と敵討を密談し、まず五助の息子半吾をおびき出し、ここに合流した江原兄弟とともに半吾を斬る。

### 敵討願書を差上、評定、成就

図書は郡山城主菅田中務太輔国香公に敵討の願書を届け出、評定の末に認められる。敵討の場に、嘉兵衛の妻お瀧も蓄えた金子を持って駆けつける。図書は山中を討ち果たし、主従で筑紫に帰り、加増と褒美にあずかる。

### 三、実録『敵討忠孝伝』との関係

このような筋を持つ『忠孝人竜伝』であるが、これと同じ内容の実録が見出せる。弘前市立図書館蔵『敵討忠孝伝』である。交渉のある実録と小説の間で、話の筋のみならず叙述の表現まで似通う箇所のあることは少なくないが、この二作品は大変に近似した本文を持つ。現在のところ『敵討忠孝伝』の所在が判っているのは、この

一点のみであるが、その奥書には「此書物誠に実録にして世に多しといへともとりわけ其根元を糺し書もとむる物也」とあり、これに拠るならば、この実録がある程度流布していたと窺わせるものである。しかしながら、書写者・年代の記載はなく、また、この実録自体の作者と成立年代についても知る手掛かりを得ることはできない。

ここで、籬島の『忠孝人竜伝』と実録『敵討忠孝伝』を比較した状況を見ていくこととする。まず、目録の条数では『忠孝人竜伝』が全二一条であるのに対して、『敵討忠孝伝』は全一八条と、三条の違いがある。これに相当するのは、『忠孝人竜伝』にあるところの「東条図書吾妻より引返す事<sup>附</sup> 小田原の宿にて敵の行衛を聞く事」「昆陽池玉の筭を求る事<sup>附</sup> 松野奢侈の事」「浅田屋舗にて図書兵法の事<sup>附</sup> 東条主従用意金の事」である。このうち、前二条はこれに当たる本文も無く、残る一条は、一部欠けるものの本文は直前の条の中に含まれている。さらに他にも、対応する両書の目録で『忠孝人竜伝』のみに附り書きの添えられた条も見られるといった状況である。

このように、実録『敵討忠孝伝』に比べて『忠孝人竜伝』のほうが目録・本文内容共多いが、しかし、このことから直ちに『敵討忠孝伝』に内容を付加して『忠孝人竜伝』が成ったと見ることもできないように思われるところがある。先掲の一条目は、敵討に出た図書が東海道を下り、小田原の宿で山中の居所を聞き、引き返して伊勢路へ向かうという筋であるが、この条が無い『敵討忠孝伝』では、前条の終末で図書は島田宿に至り、すぐさま続けて「夫より伊勢路をさして趣きける」とある。しかしこれでは、図書が経路を変えて引き返してゆく事由が語られず、不自然であろう。この箇所は実録

のほうでも元は小田原宿で的一条が存在していたものが脱落したものではないだろうか。また二条目は、遊女となった江原弟の妻お瀧（松野）の身請け後の暮らしを描く内容である。これは敵討話の本筋には関与しない挿話的な部分であり、この条が無い『敵討忠孝伝』においても不可解な展開とはならない。この内容は、作品の終末部において、敵討の場にお瀧が現れて自身のこれまでの経緯を告白する部分に繋がるが、この終末部に語られる内容に合う形で増補されたこともあり得るものである。

続いて、筋や人物の点ではほぼ同一と言える本文について精粗の具合を比較してみると、大きな点として『忠孝人竜伝』のほうに『敵討忠孝伝』にはないくだり（終末部にて図書主従の帰国後、筑紫の主君の上覧に入る敵討の経過・成就の書付が記され、これによって本話の大筋が再述されることとなっている）があるほか、もう少し委細な点において、次の例のような違いが散見される。（句読点・引用符は引用者による。）

「中山に奉公を所望された図書の処置を主人の帯刀が決める段」

『敵討忠孝伝』

「（前略）御主人御賢慮あらは如何様にも仰付られたし」と申ければ、帯刀しはらく思案し、「我存念ならば中山方へ遣すへし。今日より随分忠勤をはけむへし。則長五郎の余義なき御事故則勇助義吾助殿方へ遣すべし。」と申けるにぞ、長五郎悦び勇助を伴ひて吾助方へぞ遣わしけり。

『忠孝人竜伝』

「（前略）御主人御賢慮あらはいかやうにも仰付らるへし」と申ければ、帯刀暫く思案し、「我存念ならば中山方へ今日より

奉公に遣すへし。随分忠勤をはけみ奉公すへし。」と則長五郎に対面し、「余儀なき御頼み辞するに詞なし。今日より五助方へ遣すへし。右の段御傳えられよ。」とあれば、長五郎大ひに悦び則勇助を召連れ五助方へぞ遣しける。

「山中の息子を斬る場で、図書が合流した江原兄弟を啼猿に示す段」

※『忠孝人竜伝』の叙述のみを掲げる。傍線は『敵討忠孝伝』にない箇所である（微細な差異は除く）。

「東の方より来りし男式人兼て御噂申上候、某は譜代の家来利兵衛嘉兵衛の兄弟なり。かれらも敵山中和州郡山に住居のよし風に聞此辺を窺ふ折から、某幼年の砌なれども見覚ある兄弟の面ざし互に名乗合不思議に今日巡り合ひし」といひければ、啼猿聞て「是こそ大望成就武運長久の基なり。目出度しく。」と云ければ、図書半吾を引寄せ、「ヤア道ならずのうろたへ者。我こそ東条助太夫か一子図書、同家来江原兄弟。汝父惣治郎に親父助太夫を討れし無念の程推量せよ。（後略）」

ここに挙げた二例とも、『敵討忠孝伝』では複数方向への発話を羅列するように連ねていくのに対して、『忠孝人竜伝』ではこれらが地の文で繋げられた文章である。殊に二例目は、各々敵捜しに出立し、ここまで別個にその旅中が語られてきた図書と家来とが合流し、結末へ向かう重要な場面であるが、『忠孝人竜伝』のみにある記述は、この場面での江原兄弟の登場を明示するものとなつてゐる。『敵討忠孝伝』は、より整った本文を持つ写本の存在した可能性もあるものの、これは講談との関連が深いとして指摘される実録の文体的特徴<sup>〔7〕</sup>と言へるのではないだろうか。対して『忠孝人竜伝』は、読本・板本として文意が明瞭に通る形に完成されているのである。

両書を比較してきた上で問題となるのは、『忠孝人竜伝』と『敵討忠孝伝』の前後関係である。実録と小説の関係については、実録が小説の素材源となつた件が多く明らかにされているが、それだけでなく、小説が実録に影響を及ぼす方向もあることについての指摘もなされている。山本卓氏は、亀山の敵討を題材とする実録のなかに『元禄曾我物語』のうちの趣向が取り込まれた系統のものがあつたことを指摘され、浮世草子の趣向が実録に流れ込むという事態を明らかにされている<sup>〔8〕</sup>。横山邦治氏は、実録『北雪美談』金沢実記と速水春曉斎作『絵本雪鏡談』の関係について、実録のほうが板本を敷衍しにしたと見られること、実録のほうの年立てに板本に引かれた為と見える矛盾があること、実録の文章が説明的に引き延ばされていることを挙げられ、出版された『絵本雪鏡談』を今一度時代や人名などを実録として書き直して貸本屋仲間に実録の写本として流したものが『北雪美談』金沢実記であろうと述べられている<sup>〔9〕</sup>。

いま『忠孝人竜伝』と、成立年代不明の『敵討忠孝伝』とを比較してきた結果、ほぼ全編にわたつて内容は同一であるなか、目録・内容共『忠孝人竜伝』のほうが多く、また文章の整い具合と完成度についても『忠孝人竜伝』のほうが高いことは確かめられたが、その前後関係を明らかにするまでの証拠は見出されない。しかし、籬島の第一作である『信長記拾遺』が、実録『石山軍鑑』をもとに著されているという籬島作品と実録の関係からは、籬島がこのときと同じ手法を取り、既存の実録を利用して『忠孝人竜伝』を著したことは強く推測されるところである。

そして、冒頭に述べたように『忠孝人竜伝』と交渉があると思われる実録として、高橋圭一氏が『非莫不朽全書』（『非英不朽全書』）



を挙げておられる。『日本古典文学大辞典』の「非英不朽全書」の項（中村幸彦氏執筆）では、この実録は、文政年間（一八一八—一八三〇）の写本があり、文化（一八〇四—一八一八）末の作かと思われ、諸本の巻冊は様々ながら内容はほとんど同じということである。筆者の参看したこの実録の写本<sup>⑩</sup>を『忠孝人竜伝』の内容と照らすと、山中惣次郎による東条助太夫斬殺から図書・江原兄弟の敵討出立、小田原での手掛かり、郡山における浅田帯刀の助力と山中家への奉公からの敵の発覚、敵討成就という大筋は『忠孝人竜伝』と通じる話である。ところが前述のような『敵討忠孝伝』と『忠孝人竜伝』との一致の具合とは状況が異なっている。この実録ではまず、この敵討を黒田藩家臣のこととし、寛文十一年（一六七二）一〇月一六日に成就したと時期を明示している。内容においては、『忠孝人竜伝』にある江原兄弟の葉の売弘の件はなく、兄弟が瘡を病み、袖乞いをして江戸と大坂を巡る点や、遊女となった嘉兵衛の妻は身請けされるのではなく大坂で悪者に殺される件、そして郡山では俳諧宗匠の啼猿は登場せず、これに相当する者として髪結の市兵衛と浪人の坂部庄馬という人物が出てきて敵討に助力する点など、とくに中盤以降に、大筋で重なる展開のなかで『忠孝人竜伝』とかなりの差異が見出されるものである。

#### 四、敵討話の形成

次に、『敵討忠孝伝』および『忠孝人竜伝』の敵討話そのものがどのような特質のものか、その成り立ちを検証していく。まず、この敵討話に出てくる筑紫の城主家中での殺傷沙汰と郡山城下におけるその

敵討について、直接的な素材と見られる実話は管見の限り見出せなかった。これに関連して、中村幸彦氏は、先にも触れた実録『非英不朽全書』の解説（『日本古典文学大辞典』）において、この敵討が創作されたものとされた上で、「歌舞伎の『非人仇討』（浄瑠璃では『敵討檻樓錦』、小説では宝暦四年（一七五四）刊の『和州非人敵討実録』）によった筋であろう。髪結が援助するものに「肥後駒下駄物」があり、福岡藩の人物も「黒田騒動物」に見える人々であるなど、様々の実録からも材を集めたものである」と述べておられる。本敵討話は、実録の仇討物には実話の有無が確かでないものがあると中村氏の言われた<sup>⑪</sup>ところに相当すると考えられる<sup>⑫</sup>。

そして、実話の定かでないところから話が如何に形成されているのか見ていくと、本話の設定や筋書に、これ以前に実録の題材となつてよく知られた話と似通うところが確かめられる。まずは、場所と登場人物に関する設定である。『敵討忠孝伝』、『忠孝人竜伝』はこの話の発端を筑紫の一城主倉田左衛門家中のこととしている（実録『非英不朽全書』においては筑紫の城主を黒田綱政<sup>⑬</sup>とする）。この筑紫城主家に関しては、黒田騒動を用いている。これは、寛永年間（一六二四—一六四八）における、福岡藩主黒田忠之による側近倉八十太夫を重用した失政に対し、改易を恐れた旧臣栗山大膳が幕府に出訴するという御家騒動であり、この件を素材とした黒田騒動物と称される実録群が明和五年以降大きく展開している<sup>⑭</sup>。本話の内容はこの御家騒動そのものの顚末とは関係していないが、城主を倉田氏とするのは黒田氏と忠之の寵臣で騒動の際罰せられた倉八十太夫を取り合わせたものと見える。また、敵討が果たされる大和郡山は、寛文十一年に藩主本多政勝が没した後、嗣子政長と実子

政利による相統争い（郡山騒動、九六騒動）のあったことが知られる。城主を誉田中務大輔国香公とするのは本多政長（受領名中務大輔）に由来する（『非英不朽全書』も政長としている）。加えて、誉田家の家老として梶金左衛門という人物が登場するが、これは九六騒動の収拾に動いたとされる本多家の家老梶金平<sup>(15)</sup>に拠るのである。このように、本話の筑紫から大和郡山への展開が、両地での御家騒動と重ねられていることが明らかとなる。

続いて、敵討話の筋に関しても、抛りどころと考えられるものが見出せる<sup>(16)</sup>。まず、図書が奉公に出た先の郡山藩主家中の中山が敵であると突き止めること、そしてこの発覚の絡繰りが全て啼猿の智謀によるものであった（啼猿が、他所から来て藩主の家中に入った中山が疑わしいと見当をつけ、その屋敷前で図書に剣術の立ち回りをさせ、中山が図書の奉公を所望するよう仕向けた）という筋について、これが影響を受けていると考えられるのが、元禄一四年（一六九八）に起こった亀山の敵討（石井兄弟の敵討）の話である。この敵討は実録（『石井明道士』）となつて流布したものであるが、その内容を伝える本島知辰編『月堂見聞集』<sup>(17)</sup>の記事（卷之一「従元禄年中至宝永年中混雑」）「伊勢亀山敵討の覚」の一部を次に掲げる。

一、私共父石井宇右衛門と申者、青山因幡守殿に知行二百五十石取罷在候処に、廿九年已前、宇右衛門にかゝり罷在候赤堀源五右衛門と申者、父宇右衛門を討立除申候、其節私共幼少にて罷在候、其以後親の敵にて御座候に付、在処方々相尋候処、板倉周防守様に赤堀水之助と名改、百五十石取罷在候由承候に付、四五年已前に御番所の御帳面に付、右の心掛にて周防守様家中

鈴木甚右衛門方へ、源藏義去年三月より奉公に罷出、半藏義は同家中下村孫右衛門方へ、五年已前若党奉公に出相勤在<sup>レ</sup>之処、当月九日勢州亀山城内三の輪石垣御門の下にて、右水之助相通る節兩人待受、言葉を掛額より頭へ掛一ヶ所切付申候処、直に倒申候、則とゞめを指候、（中略）

己の五月廿七日

源藏 卅四歳

半藏 卅一歳

源藏義は草履取奉公森平、半藏は若党奉公仕、有沢儀右衛門と申候、

この話は、幼少時に父を縁者の赤堀源五右衛門に殺された石井兄弟が敵討に立出、尋ね廻った末に赤堀が改名して亀山城主家中に仕えることを突き止め、兄弟は奉公人として家中に入り、討ち果たしたというものである。『敵討忠孝伝』および『忠孝人竜伝』の敵討話は、この話での敵の居所を突き止めて奉公人となつて潜入するという展開を、啼猿の智謀で奉公に出された先で敵を突き止めるというように若干の改変を加えつつ用いたのではないかと考えられる。

また、家来の江原兄弟による敵捜しと道中彼らが葉を売り歩く件に関しても、影響の窺える話がある。この部分を少し詳しく述べるに、『忠孝人竜伝』には、出立して五六年、持参の路費が尽きかけるも未だ敵を捜し当てられずに兄弟が嘆くところから、次のようにある。（句読点・引用符は引用者による。）

利兵衛風と思ひ出しふやうは「先年長崎へ下りける節、南蛮流の名醫方に暫し同居の折から、諸瘡立所に治するの秘法を伝授せり。是は諸の寒葉を以て一旦は忽平癒すといへども、一兩月過れば又本の如くなるの方や。路用の扶けなれば是を調合し

売弘めばや。」と云ひければ、嘉兵衛大ひに悦び、「是究竟の方便なり。」とある城下の薬店にたより此方を調査し、路金の残りを以て利兵衛は南蛮流の衣服をあつらへ異形に立、頭巾等まで心を尽しける。嘉兵衛は家来の姿にやつし、在々宿々にて弘めければ（下略）

この妙薬による療治で路費を蓄え、さらに大磯では頼まれて瘡を病む娘にこれを処方したことにより多額の薬札を得、それより兄弟は北国へ向かう、という筋である。そしてこの件が扱っていると考えられるのが、宝暦十三年（一七六三）に陸奥国で行われた佐々木清十郎の敵討である。この敵討は実録になっており、小二田誠二氏が『敵討膏薬奴』等のこの素材を文芸化した作品について、内容と展開の比較からその形成方法を考証されている<sup>(18)</sup>。では、この敵討の経過について、小寺玉晃編『諸家随筆集』<sup>(19)</sup>所収『村井随筆』に記されるところを掲げ、江原兄弟の件との関係を確認する。

豊後国森一万二千六百石、久留島信濃守殿家中、  
佐々木清十郎 十九歳  
去年中旦那が煉た膏薬と売り歩行申候。

清十郎家来 中川重内 三十歳

同 弥五郎

右は清十郎父軍右衛門事、信濃守殿の家老役を相勤罷在候処、寛延三年四月六日夜、実弟九郎右衛門に切殺され、其後九郎右衛門兄軍右衛門が妻を召つれ立退候。其砌清十郎儀五歳、以之之家来重内養育いたし候。右妻は半年程過ぎ病死いたし、清十郎儀成長いたし、去年四月信濃守殿奉<sup>二</sup>暇願<sup>一</sup>、兩人之下人召つれ、所々を相尋候処、九郎右衛門事久松喜遊治と名乗、仙台に罷在

候段承届、其所<sup>江</sup>罷越候処、相馬<sup>江</sup>参り候由承および、相馬彈正少弼殿<sup>江</sup>申達候得ば、公儀<sup>江</sup>伺之上、いろ／＼御世話も有<sup>レ</sup>之、首尾能敵を討候由。

宝暦十三年未五月廿五日、敵討。

母と密通した叔父の九郎右衛門に父を殺された清十郎が、家来二人とともに九郎右衛門を尋ね廻り捜し当てたというもので、敵討に立する主従という設定が同じである上、とくに清十郎の家来が膏薬を売り歩いたとするところについて、これを取り込んで江原兄弟が南蛮の妙薬を売り歩く件が成されたことが推察できる。なお、江原兄弟が東海道を下り、大磯で若い娘に遇う件は、曾我兄弟の影響であろう。

そして、先述のように中村幸彦氏が『非英不朽全書』が扱っていると指摘されたうちの、『敵討檻樓錦』（元文元年（一七三六）初演）<sup>(20)</sup>からの影響についても捉えておきたい。前項においては、御家騒動との重なりを捉えた大和郡山であるが、この地での敵討話というのは『敵討檻樓錦』に描かれるところである。そしてこの作品の敵討では、発端に殺されるのが春藤助太夫（息子の名は助太郎）という人物であり、東条助太夫・助太郎親子と重なる。また『敵討檻樓錦』において敵討に助力する家来は妻に身売りさせて資金を得ており、嘉兵衛の妻お瀧が遊女にされ金を蓄えていく件に通じるものと言える。

以上のように、『敵討忠孝伝』および『忠孝人竜伝』の敵討話の設定と筋については、御家騒動や実録の素材として知られた話の複数を、改変を加えながら組み合わせ利用し、作り上げられたであろう実態が認められるのである。



## 五、『忠孝人竜伝』の位置

ここまで見てきたように、関連の認められる作品との間で『忠孝人竜伝』の独自性を特定することは難しいが、この作品と実録作品との関係、そして敵討話そのものの形成段階における実録領域の諸種の事項との繋がりが確かめられた。続いて、籬島によるこの著作が世に出された事情とその位置付けについて考察を加えていきたい。

まず、書名に「人竜伝」とあることについて、これは関連する実録には見えない名称であるが、次の籬島の自序からその意味するところを辿ることができる。（句読点は引用者による。）

ひかしには祇園清水、西は法輪嵯峨の御寺と諷ふも謀計の一つにして、遂に父讎を報じぬ。こゝにしらぬ火のつくしかたの武士何某は、五歳の時に父を討れ百憂千悲にしづみ、漸成長ても敵人の面貌を知らず。しかれども胸中には葛陂の杖を携、雲を起し雨をふらすの謀をめぐらして速に敵人を露顕し、讎を討て年来の功を達しぬ。これを忠孝人竜伝と名て、うち治りたる御代の玩となし千載不朽の美名を此いつ、のまき／＼に賞するのみ。

皆に天明二寅のとし春正月

撰者 秋里湘夕

このなかの「葛陂の杖」というのは、晋代・葛洪著『神仙傳』<sup>(21)</sup>「壺公」に由来するものである。「壺公」は、仙人の壺公に認められた費長房という人物が、神術を与えられて鬼神を操る話である。このなかで、壺公に伴って仙界に行くことにした費長房は、壺公に渡された竹の杖を自身の代わりに寝所に置き、家を出る。家人にはこの杖が費長房の亡骸と見え、葬る。のち地上界に戻る時、費長房は壺

公に再び竹の杖を渡され、これに乗って家に至る。家人を前に自らの棺を開けると、中にはただ竹の杖があった。そして、乗って帰った竹の杖を葛陂（河南省の湖沼）に投じたところ杖が青龍となった、という。さらに、のちに費長房は東海（山東省）に赴く。そして日照りに悩むこの地で、彼が捕らえていた神を赦すことによってたちまちに大雨を降らせた、とある。

つまり「人竜伝」とは、仙人より与えられ、費長房そして龍に化した杖の変幻から来た命名であろう。そしてこの杖の件に、仙人に授けられた神術による降雨の験の意味を加えて、本敵討話での面影を知らない敵を捜し当てる智謀の妙を例えたということではないだろうか。

次いで、本書をめぐる出版事情に目を向けてみる。本屋仲間の記録に本書の出版に関する事項は見られないが、調査したところ、鈴木半兵衛・西村市郎右衛門・永田調治の京都の三軒による板本と大阪の前川善兵衛による後刷本がある。前者の刊記も残す後刷本の見返し<sup>(22)</sup>には「皇都書林 載文堂 文昌堂梓」とあり、文昌堂の堂号からすると、永田調治は永田調兵衛と関係する書肆か<sup>(23)</sup>と思われる（載文堂は西村市郎右衛門）。

そして、この永田調治の開板した書物に、本書と内容・体裁の類似するものが見出せる。安永六年刊『南部敵討』小栗忠孝記<sup>(24)</sup>半紙本五卷五冊である。この作品の内容は、元阿波国藩士で奥州南部藩に仕える小栗毛平が同藩の土竹内新吾に意趣によって殺され、小栗の下僕である喜助と阿波国に残る一子万治郎が竹内を討ち果たすという敵討話である。この『小栗忠孝記』については、長友千代治氏が貸本屋の隆盛を示す事例として取り上げられているが<sup>(25)</sup>、

長友氏によると、『小栗忠孝記』は初版板行後に板木が焼失し、享和二年（一八〇二）に籙島の序文を付す覆刻版が出ており（初版の序は作者随山による）、籙島の序によってこれが貸本屋の需要による板行と知られるということである。この覆刻版の序文執筆という件には、『忠孝人竜伝』の作者である籙島と『小栗忠孝記』の近さが視えるようにも思われる。前項では、籙島の著述活動のほうから見て、実録に拠った『信長記拾遺』の手法との繋がりを推測したが、加えて書肆に関しても併せ見たとき、永田調治が五年前に手がけた敵討物の『小栗忠孝記』と同類の書物として『忠孝人竜伝』が企画・出版されたことが考え得る。

最後に、本項で検討した『忠孝人竜伝』と『信長記拾遺』および籙島の後年の小説作品との繋がりを、そして同時代の小説の展開における籙島の初期小説の位置を考える。籙島は安永九年の『都名所図会』の成功により、天明七年（一七八七）の『拾遺都名所図会』、寛政三年（一七九一）の『大和名所図会』以下、畿内各国の名所図会を立て続けに執筆していく。そうしたなかで、寛政六年刊『源平盛衰記図会』において、名所物ではなく軍記を題材にした図会物の制作に乗りだし、以降『絵本朝鮮軍記』（寛政一二年刊）、『保元平治闘図会』（享和元年刊）、『前太平記図会』（享和三年序）と執筆している。このことが、流行に乗った図会形式の派生的な展開であることは間違いないが、その派生の方角として、籙島が軍記という題材に向かった点については、歴史的事件を扱う実録の領域に深く関わる『信長記拾遺』および『忠孝人竜伝』という初期小説の執筆が礎となっているように見えてくるのである。

そして同時代の小説・出版界に目を向けると、横山邦治氏は、天

明はじめの中本読本『敵討連理橋』と『女敵討記念文箱』が実録に根ざした作品であり、これを受けた文化初年の敵討ものの全盛と、一九による実録系の作品の隆盛があることを述べておられる<sup>(26)</sup>。天明二年刊『忠孝人竜伝』は、実録を種本とした安永五年刊『信長記拾遺』とともに、実録の影響を受けた成り立ちを有する点と、敵討という題材の点において、そうした先駆的な位置の作品に連なるものと言えよう。そして享和年間以降には、速水春曉斎の作を中心として絵本読本の制作が隆盛を迎える。絵本読本については、浜田啓介氏による岡田玉山『絵本太閤記』を実録『太閤真蹟記』と対比された検証<sup>(27)</sup>や、菊池庸介氏による速水春曉斎作の絵本読本に関する種本の解明等により<sup>(28)</sup>、実録との強い繋がりを持つて成された作品群であることが明らかにされている。籙島の初期小説は、近世中後期の小説の展開のなかで、実録種の絵本読本に先行する意味を持つものとして捉えられるのではないだろうか。

注(1) 浅野三平氏『近世中期小説の研究』『秋里籙島』（一九七五年、桜楓社）。

(2) 横山邦治氏『読本の研究——江戸と上方と——』（一九七四年、風間書房）第一章「展回期の読本」第三節「絵本ものの諸相」。

(3) 高橋圭一氏『実録研究——筋を通す文学——』（二〇〇二年、清文堂出版）付論「読本と実録」。

(4) 拙稿『「信長記拾遺」考』『国文』第一一四号（二〇一〇年十二月）。

(5) 国立国会図書館蔵本（大野屋惣八旧蔵本）による。以下

- (6) の『忠孝人竜伝』の引用もこれに拠る。  
但し、内題の卷二のみ「敵討人龍伝」、板心の卷五最終丁のみ「忠孝人竜伝」とある（初板、後刷本共）。
- (7) 中村幸彦氏「実録、講談について」（『中村幸彦著述集』第一〇巻（一九八三年、中央公論社）所収）に指摘される。  
山本卓氏「『元禄曾我物語』致——浄瑠璃利用と実録への展開を中心に——」（『国文学』六八（一九九一年一月）注（2）に同じ。
- (8) 関西大学図書館中村幸彦文庫蔵『非英不朽全書』（L24/14-150、書写年不明）と『郡山敵討』（『非英不朽全書』の別称）（L24/14-151、文政二年写）（L24/14-152、文政九年写）。
- (9) 注（7）に同じ。
- (10) 関西大学図書館中村幸彦文庫蔵『非英不朽全書』（L24/14-150、書写年不明）と『郡山敵討』（『非英不朽全書』の別称）（L24/14-151、文政二年写）（L24/14-152、文政九年写）。
- (11) 注（7）に同じ。
- (12) 『非人敵討』（宝暦四年刊、国立国会図書館蔵）巻末「非人敵討真偽の弁」に「此仇討は慶安年中の事なり。九州の士兄弟親の敵を郡山の家中におひて討たり。又其時節同国大安寺の墓所にて。非人が殺害せられしと採交へ京都大坂へも聞。非人の敵討有と申触しける。」（傍線引用者）とあるところに関連する可能性も考えられる。
- (13) 関西大学図書館中村幸彦文庫蔵『郡山敵討』（L24/14-151）には黒田忠之とあるが、この写本も年代は寛文一一年としてゐる。
- (14) 注（7）に同じ。
- (15) 『藩史大事典』（一九八八年、雄山閣出版）による。
- (16) 敵討事件について平出鏗二郎氏『敵討』（一九七五年覆刻、
- (17) 歳月社）、実録の諸種について菊池庸介氏「主要実録書名一覧稿」（『近世実録の研究——成長と展開——』（二〇〇八年、汲古書院）を参考した。
- (18) 『続日本随筆大成』別巻「近世風俗見聞集」（一九八一年、吉川弘文館）。
- (19) 小二田誠二氏「事実から小説へ——膏藥奴の敵討を素材に——」（『江戸文学』八（一九九二年三月）。
- (20) 『三田村鳶魚編鼠璞十種』上巻（一九七八年、中央公論社）所収。続帝国文庫二七『文耕堂浄瑠璃集』（一九〇〇年、博文館）所収。
- (21) 『中国古典小説選』二（二〇〇六年、明治書院）。
- (22) 東京大学総合図書館蔵本、国文学研究資料館蔵マイクロフィルム中村幸彦氏蔵本。
- (23) 『享保以後江戸出版書目』（新訂版、朝倉治彦等編、一九九三年、臨川書店）には永田調治等刊『小栗忠孝記』（後述）の板元を永田調兵衛としている。
- (24) 京都大学附属図書館蔵（大野屋惣八旧蔵本）。
- (25) 長友千代治氏『近世貸本屋の研究』（一九八二年、東京堂出版）。
- (26) 注（2）前掲書第一章第二節「中本ものの諸相」。
- (27) 浜田啓介氏「絵本太閤記と太閤真蹟記」（『読本研究新集』二（二〇〇〇年六月、翰林書房）。
- (28) 菊池庸介氏「実録と絵本読本——速水春曉斎画作「実録種」絵本読本をめぐって——」（『近世文藝』八六（二〇〇七年七月）等。

本稿は、平成二四年度学術研究助成基金助成金（若手研究（B））の成果の一部である。

（ふじかわ れまん） 本学 文学部 日本語日本文学科

キーワード 秋里籬島、忠孝人竜伝、実録